

## 7.1 波動方程式

マックスウェルの電磁方程式は以下の 4 本の式からなる.

$$\nabla \cdot \mathbf{D} = \rho, \quad (7.1)$$

$$\nabla \cdot \mathbf{B} = 0, \quad (7.2)$$

$$\nabla \times \mathbf{E} = -\frac{\partial \mathbf{B}}{\partial t}, \quad (7.3)$$

$$\nabla \times \mathbf{H} = \mathbf{I} + \frac{\partial \mathbf{D}}{\partial t}. \quad (7.4)$$

ここで  $\mathbf{E}, \mathbf{H}$  は電場と磁場,  $\mathbf{D}, \mathbf{B}$  は電束密度と磁束密度,  $\rho$  は電荷密度,  $\mathbf{I}$  は電流密度である.  $\mathbf{E}$  と  $\mathbf{D}$ ,  $\mathbf{H}$  と  $\mathbf{B}$ ,  $\mathbf{E}$  と  $\mathbf{I}$ の間には以下の関係が成り立つ.

$$\mathbf{D} = \varepsilon \mathbf{B}, \quad (7.5)$$

$$\mathbf{B} = \mu \mathbf{H}, \quad (7.6)$$

$$\mathbf{I} = \sigma \mathbf{E}. \quad (7.7)$$

ここで  $\varepsilon, \mu, \sigma$  はそれぞれ誘電率と透磁率, 電気伝導率である.

- (1)  $\mathbf{E}, \mathbf{H}$  の満たす方程式を求めよ.
- (2) (1) において, 真空中の場合 ( $\rho = 0, \sigma = 0$ ) の場合の方程式を求めよ.

## 7.2 非圧縮性流体の運動

密度一定の理想流体の運動方程式と連続の式 (質量保存則) は, 以下の方程式で記述される.

$$\frac{\partial \boldsymbol{v}}{\partial t} + (\boldsymbol{v} \cdot \nabla) \boldsymbol{v} = \nabla \left( \frac{p}{\rho} \right), \quad (7.8)$$

$$\nabla \cdot \boldsymbol{v} = 0. \quad (7.9)$$

ここで  $\boldsymbol{v} = \boldsymbol{v}(x, y, z, t)$  は速度ベクトル,  $p, \rho$  はそれぞれ圧力と密度である.

- (1) (7.8) の両辺の回転をとることで渦度方程式

$$\frac{\partial}{\partial t} (\nabla \times \boldsymbol{v}) = \nabla \times [\boldsymbol{v} \times (\nabla \times \boldsymbol{v})]$$

をもとめよ. ここで渦度とは  $\nabla \times \boldsymbol{v}$  のことである.

- (2) 渦無し流の場合 ( $\nabla \times \boldsymbol{v} = 0$ ) の場合, スカラー関数  $\phi(x, y, z, t)$  を用いて

$$\boldsymbol{v} = \nabla \phi$$

と書けることを確かめよ ( $\phi$  は速度ポテンシャルと呼ばれる).

- (2) 渦無し流の場合, 上記のスカラー関数  $\phi$  は

$$\nabla^2 \phi = 0$$

を満たすことを示せ (この式はラプラス方程式と呼ばれる).

- (3) 定常な渦無し流の場合, 運動方程式から

$$\frac{1}{2} v^2 + \frac{p}{\rho} = \text{一定}$$

が導かれることを示せ (ベルヌーイの方程式). ここで  $v = |\boldsymbol{v}|$  である.